



図5 振り固有振動数に関する計算値と実験値の比較

致せしめうることを明らかにした。この際計算には長方形要素を用いる方が精度がよい。しかし、曲げモードの固有振動数ははるかに少ない要素分割数で精度のよい結果を与えていることからすると、曲げと振りのモードについて平衡のとれた計算法を見出していく必要があろう。また、以上で見出された諸点に留意して実際の構造について実験解析をすすめることも今後の課題である。おわりに計算機の使用にあたりご援助を頂いた本所川井教授、日本マーク安達社長に感謝する。

(1980年8月11日受理)

参考文献

- 1) H. Sato, Y. Kuroda and M. Sagara: Development of the Finite Element Method for Vibration Analysis of Machine Tool Structure and Its Application, Proc. 14th MTDR, 1973, McMillan, 545
- 2) 黒崎, 西田, 佐藤: 工作機械構造の有限要素法による振動特性解析, 機講論 760-17, 昭 51-10, 89
- 3) H. Opitz: Moderne Produktions Technik, Girardet 1970, 196

正 誤 表 (10 月号)

頁	段	行	種 別	正	誤
471	右		図の標題	図10 脈動流の振動数(流動状態[B]) 図11 脈動流の振動数と下流管長さ	図11 脈動流の振動数と下流管長さ 図10 脈動流の振動数(流動状態[B])
477	左	↑ 1	数 式	$\binom{2n}{r}$	$\binom{2n}{r}$
"	右	↓ 1	"	$\binom{2n+1}{r}$	$\binom{2n+1}{r}$
"			図 2 (c)	$(\times \frac{1}{5})$ を追加	
492	左	↓ 10	本 文	前 2 報	前前 2 報